小学校の表現運動において指導言語が動きに及ぼす影響
—運動用語と擬音語・擬態語との比較—

吉川京子

Ⅰ．目　的

表現運動は，その価値を認められながらも，指導が難しいと教師から敬遠され，表現運動の価値に触れる機会を多くの児童から奪っているのが現状であり，誰にでもできる表現運動の指導法の普及が急務とされている。それには，どのような指導言語が表現運動を多様化させるのか検討し，指導言語の選択基準尺度を作成し提示する必要があろう。前回の研究では，表現運動の指導事例に見られる用語を分析し，指導言語を要因別に分類したが，更に，各要因と動きとの関係を明らかにしていくことが必要とされた。

そこで，本研究では，各要因から多様に選択された指導言語で構成された指導案の実践により，動きの多様化を検証すると共に，運動用語を用いた場合と擬音語・擬態語を用いた場合との動きの違いを明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．方　法

小学校３年生の音楽教材「いるかはざんぶらこ」を表現運動の題材とし，イメージ及び動きが多様化に向かうように指導言語を作成した。指導言語は，1.イメージに関する用語（①主体②場所③行動④環境変化⑤気分・情緒），2.運動の質に関する用語（①動き②空間③時性④力性⑤身体部位⑥友達との関係），3.擬音語・擬態語，4.発問，より構成した。作成した指導言語により実験授業を現職教員に実践してもらい，VTRに録画した。運動用語を用いたクラスと擬音語・擬態語を用いたクラスの児童の動きを分析し，比較検討した。実験は，２校，各々２クラスで行い，児童計124名を対象とした。実験期日は，平成８年12月２日～11日であった。両校共に，児童は，以前に表現運動を経験しているが，「表現運動の楽しさ体験」，「表現運動の好嫌」について事前調査したところ，Ｒ校では，「どちらでもない」が，Ｆ校では，「楽しかった」「好き」が各々児童の半数以上を占め，両校では異なっていた。

Ⅲ．結果及び考察

両校共に，運動用語「跳ぶ」，擬音語・擬態語「ザバッ，ザッブーン」では，「跳ぶ」動き，運動用語「転がる」，擬音語・擬態語「ゴロリ，ゴロゴロ」では，「転がる」動き，運動用語「寝る」，擬音語・擬態語「スヤスヤ」では，「寝る」動きが大多数の児童に見られ，最も多く出現する児童の動きに，運動用語，擬音語・擬態語による，違いは見られなかった。従って，これらに関しては，指導言語に，運動用語，擬音語・擬態語のどちらかを用いても同様な固有の動きを誘発すると考えられる。

しかし，運動用語「泳ぐ」，擬音語・擬態語「スイスイ，スーイ」では，指導言語に運動用語を用いた場合と，擬音語・擬態語を用いた場合とでは，児童の動きに違いが見られた。運動用語では，擬音語・擬態語に比べ，「這う」動きが多く出現したのに対し，擬音語・擬態語では，運動用語に比べ，「歩く」「走る」「腕をかく」動きが多く出現した。従って，「泳ぐ」に関しては，指導言語として，運動用語と擬音語・擬態語とを併用することによって，児童の動きを多様化に向かわせることが可能であると考えられる。

一方，Ｒ校では，運動用語「跳ぶ」では，「跳ぶ」の他に，擬音語・擬態語に比べ，「走る」動きが多く出現し，擬音語・擬態語「ザバッ，ザッブーン」では，運動用語に比べ，「倒れる」が多く出現したのに対し，Ｆ校では，その逆であり，運動用語，擬音語・擬態語による動きの出現傾向が，学校間で異なっていた。同様に，「浮かぶ」については，Ｒ校では，多く見られなかった「這う」動きが，Ｆ校では，運動用語，擬音語・擬態語共に多く見られた。更に，Ｒ校では，運動用語「浮かぶ」「転がる」を用いた場合に腕の動きが多く見られるのに対し，Ｆ校では，擬音語・擬態語「スイスイ，スーイ」「ザバッ，ザッブーン」を用いた場合に多く見られ，児童から出現する動きに学校間における違いが認められた。その一因として，「表現運動の楽しさ体験」及び「表現運動の好嫌」が学校間で異なっていたことが関与しているのではないかと推察された。

表現運動の楽しさ体験が豊かであり，表現運動が好きな児童が多いＦ校においては，特に，運動用語よりも，擬音語・擬態語を用いた場合の方が，上肢の多様な運動を誘発している傾向が認められた。また，環境変化のイメージ語に，擬音語・擬態語を加えた場合においても，同様な傾向が認められた。従って，擬音語・擬態語は，運動用語に比べ，多様な動きの発見を支援する指導言語として，表現運動の楽しさ体験が豊かであり，表現運動が好きな中学年の児童において，より有効であることが示唆された。

また，各要因から多様に選択された指導言語を用いたことによって，運動用語を用いた場合にも，擬音語・擬態語を用いた場合にも，多様な運動の出現を児童に認めることができたことより，イメージを伴って多様な運動経験を児童に保証し，動きを発見し，イメージと動きの融合を支援していく際の指導言語選択の基準として有用であると考えられた。